

第41話 (23頁) リスとオオカミ

リスが枝から枝へとびはねていると、ねむっているオオカミの上に、すんと落ちてしまいました。オオカミはとびおきて、リスを食べようと思いました。リスは「放してください」と、たのみました。オオカミは言いました。

「よし、放してやろう。ただし、ひとつ教えてくれ。どうしておまえたちリスは、そんなにうれしそうなんだね。おれはいつだってさびしいというのに、おまえたちときたら、あっちの上のほうで、いつでもびよんびよん遊んでいる。」

リスが言いました。

「まず、わたしを木の上に放してください。上からお話ししましょう。でないと、こわくていけません。」

オオカミが放すと、リスは木の上になげ、そこからこう言いました。

「あなたがさびしいのは、あなたがいじわるだからです。いじわるをするから、気がめいるのです。わたしたちが楽しいのは、わたしたちが親切で、だれにもいじわるをしないからです。」

「リスは善で、オオカミは悪。リスは親切で、狼はいじわる。そんなリスを食べようとしたオオカミだから、最初から悪者と決めつけられていて当然かな。」

「しかも、リスの方が上手というか、頭も働いた。自分たちがいつもうれしそうなのを教えてほしいのなら、まず放してほしいと持ちかけて自由の身になった。」

「リスは『わたし』で、オオカミは『おれ』。訳の選び方も対照的だね。」

「リスが木の上からオオカミに向かって話しかけた返事で締めくくっている。そこまで答を言わないで、読む人をじりじりさせて盛り上げてきた。結びが決まっているよ。」

「オオカミはどんな顔をしたのだろうか。そんな想像もしたくなる。」

「リスって、こんなに賢いとか、いい動物というイメージは自分たちにはないなあ。」

「それはともかく、話の中のオオカミはとてもかわいそうになってくる。意地悪だからさびしい思いをするんだとまで、リスに言われてしまう。」

「さびしいのは友達ができないから。そこがポイントのはずなのに、話の中ではこのフレーズが抜けているよ。」

「本当に一匹狼だ。それも強なくて弱い…」

「ところで、牧畜が盛んなヨーロッパでは、オオカミは一般的に嫌われ、恐れられてきた。せっかく放牧していた家畜を食い殺すから。」

「童話の『赤ずきん』に出てくるオオカミは、その典型だよ。」

「古代ローマの神話では、双子の建国者は牝狼に育てられ、その乳房を吸っている像はとて

も有名なのに、ね。」

「農業国の日本は違う。鹿などから農作物を守る益獣だし、大神（おおかみ）が語源というように狼信仰まで伝えられてきた。」

「アニメ映画『おおかみこどもの雨と雪』なんか、絶滅したはずだった日本狼の子孫と人間の子どもの感動的なヒューマンストーリーだった。」

「アーズブカから発展してすっかり、オオカミ論議になっちゃった。トルストイのオオカミ観もヨーロッパ的だったことを確認して、この辺で終わろうか。」